

黙示録17章1-6節 「大淫婦バビロン」

1A 女の着ている座 1-2

1B 大水の上 1

2B 地の王たち 2

2A 不品行の杯 3-4

1B 獣の上 3

2B 豪奢な身の飾り 4

3A 大バビロン 5-6

1B 秘められた名 5

2B 聖徒たちの血 6

本文

黙示録17章に入ります。私たちは既に、七つの封印にあるすべての災いを見てきました。第七の封印が解かれて、七人の御使いが出て来て七つのラッパを吹き鳴らしました。そして第七のラッパが吹き鳴らされた時に、聖所から七人の御使いが出て来て、鉢を地上にぶちまけました。その災いが下される主な対象は、獣の国とその住民です。獣の国において、イエスの御名を守る者たちは獣の名の刻印を押されること、また獣の像を拝むことを拒んで、殺されます。しかし、その住民に対して主が究極の怒りを示されます。そしてそのような災いが下った後に、獣、また偽預言者、また悪魔が最後のあがきをします。地上の王たちを惑わし、メギドの丘に集結させるのです。ハルマゲドンと呼ばれます。

ですから獣の存在は世の終わりの時に最も大きなものの一つです。けれども、もう一つ主が終わりの日に裁かれる存在があります。「大バビロン」です。主は、14章において、その獣の国に対する裁きを宣言されるとともに、「大バビロンが倒れた」という宣言もされました。「14:8 倒れた、倒れた、大バビロンが。御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた都が。」そして最後の最後の災い、すなわち第七の鉢において、「16:19 あの大きな都は三つの部分に裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。神は大バビロンを忘れず、ご自分の激しい憤りのぶどう酒の杯を与えられた。」とあります。

1A 女の着ている座 1-2

そこで主は、御使いによってヨハネに対して、大バビロンに対する裁きを17章と18章にかけてお見せになるのです。そしてバビロンが倒れて、天に大歓声があり、それから主ご自身が天から地上に戻って来られて、獣の率いる世界の軍隊と戦われる場面が19章に出て来ます。

1B 大水の上 1

¹ また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。

七つの鉢を持つ七人の御使いがそれらの鉢を投げつけた後に、その一人がヨハネに話しかけました。これまでも、「ここに来なさい」という呼びかけがありましたね。黙示録 4 章において、天にヨハネを引き上げる時に、天からの声が、「ここに来なさい」でした。全く異なるところに、ワープするかのように御霊によって引き連れて行かれます。

その場所が、「大水」であります。それがどこなのか、と言いますと、15 節に「あなたが見た水、淫婦が座しているところは、もろもろの民族、群衆、国民、言語です。」とあります。世界の人々と言えます。けれども、大水とはそのような世界の人々の流行と言ったらよいでしょうか、世界の流れを表しているものです。ダニエル書 7 章における、ダニエルが見た幻を思い出してください、「7:2-3 ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。」とありました。四頭の獣は、世界を制覇する国々であり、神の民であるイスラエルを荒らす国々であります。バビロン、ペルシア、ギリシア、そしてローマであり、そのローマから小さな角が出て、荒らす忌まわしい者が現れます。そして聖徒たちにその角は打ち勝つとありました。この世、その勢いのある流れがあり、その流れにおいて、神に希望を置き、神に信頼する者たちが翻弄され、時には押しつぶされ、時には血を流すという、そういった流れを、ここの大水は象徴しているのです。

その上に「座している大淫婦」がいます。座しているということは、牛耳っている、支配している、影響力を及ぼしていると言ってよいでしょう。誰もが抗うことのできない強い力であり、それに逆らうのであれば強い圧迫を受け、迫害を受けます。そして、それが「大淫婦」というのですがなぜ突然女の存在がでてくるのか？そして、それが淫らな行いをし、それによって莫大な利益を上げている女となるのか？というところでもあります。淫行と富というのは、密接に結びついています。ポルノ産業というのは莫大な収益を得ていると言われます。IT 企業よりもはるかに大きな収益と言われています。誰に対しても説明責任を持たないような存在、やりたい放題の存在です。

彼女が大バビロンと呼ばれているのですが、これは旧約聖書を学んだ私たちは、身の覚えがあるのではないのでしょうか？主が、預言者イザヤ、そしてエレミヤによって語っていただきましたが、エルサレムを破壊し、神の民ユダヤ人を虐げ、奴隷として捕え移し、巨大な富と栄華を築き、そして偶像礼拝の奥深いところまで入り込んでいた、豪奢で冒瀆的な都です。そのバビロンについて、「女王」という言葉を使いました。「イザヤ 47:5-7」娘カルデア人たちよ。黙って座り、闇に入れ。あなたはもう、国々の女王と呼ばれることはないからだ。6 わたしは、わたしの民を怒って、わたしのゆずりの民を汚し、彼らをあなたの手に移したが、あなたは彼らをあわれまず、老人にも、ひどく重

いくびきを負わせた。7 あなたは『いつまでも女王でいよう』と考えて、これらのことを心に留めず、自分の終わりのことを思うことさえしなかった。」

主は、ご自分と人との関係を、夫と妻との関係に例えられています。神とイスラエルとの関係において、イスラエルが偶像礼拝を行なったから姦淫を犯している女に例えておられました。そしてキリストと教会は、花婿と花嫁の関係です。そして黙示録では大バビロンが大淫婦であれば、19章では教会が整えられた花嫁であり、21章では、天のエルサレムは夫のために整えられた花嫁と書かれています。私たちが、キリストのみを主として、この方に愛され、この方を愛して、主のみに従うというのが、清純な花嫁であれば、自分の欲に仕え、この世が提供するあらゆる欲望を追い求め、力を得ていくというものであれば、それが不貞の女、あるいは淫婦と言えるでしょう。

2B 地の王たち 2

² 地の王たちは、この女と淫らなことを行い、地に住む人々は、この女の淫行のぶどう酒に酔いました。」

「地の王たち」がこの女に関わっています。つまり、偽りの宗教がこの世の権力と深くかかわっています。主なる神との関係が恵みによるものでありますが、それに取って替わる関係によって、人々はまるで酔いしれるようにしてお金を注ぎこんでいきます。いかがでしょうか、この世にある宗教は、それを求める切実な思いは、純粋なものが多いです。しかし、宗教がその思いを利用して、富と権力を得ようとします。病気の人であれば、無病息災の宗教にはまります。心の空しさを埋めるのであれば、スピリチュアル系のものが流行ります。しかし、それを行なっている者たちは、約束はしてもただ口だけで、その人々を束縛し、がんじがらめにして、お金を吸い上げて、そして酷い時は淫行をするための道具にします。そして政治家にも近づき、権力を持とうとします。

キリスト教会でも、異端やカルトが出現します。ペテロ第二の手紙とユダの手紙には、同じような類いの偽教師が告発されています。「Ⅱペテ 2:1-3 しかし、御民の中には偽預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れます。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込むようになります。自分たちを買い取ってくださった主さえも否定し、自分たちの身に速やかな滅びを招くのです。2 また、多くの者が彼らの放縦に倣い、彼らのせいで真理の道が悪く言われることとなります。3 彼らは貪欲で、うまくこしらえた話であなたがたを食べ物にします。彼らに対するさばきは昔から怠りなく行われていて、彼らの滅びが遅くなることはありません。」

黙示録の七つの教会でも、同じ問題を主は取り上げておられました、ティアティラの教会にいた女預言者イゼベルです。「2:20-22 けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。21 わたしは悔い改め

る機会を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしな。22 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ込む。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。」教会と呼ばれているところであっても、真実に主を信じていない、悔い改めていない者たちは、大患難の中に投げ込まれます。そして、キリスト教会と名乗りながらも世の流れの中にすっかり取り込まれた中で、偽りの宗教、偽りの教えに拠り頼んでいるということが、十分にあり得るのです。

それでイエス様が、警告されました。「マタイ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」そして、畑の中の毒麦のたとえもあります。主人は、毒麦を抜き集める時に、麦もいっしょに抜き取るかもしれないと思って、そのままにしておくことを選びますが、収穫の時期にはその実がはっきりしますので、毒麦を集めて火で焼き、良い麦も集めて倉の中に収めます。

そしてテサロニケ第二の手紙 2 章には、不法の人が現れる時に、「2:3 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。」とあります。教会の背教があつて、それから反キリストが現れます。ですから、ここの大淫婦とキリスト教会は、無関係ではなく、むしろ私たちの主に対する純粋な思いを汚す、世からの大きな誘惑との戦いの対峙の中で描かれています。

2A 不品行の杯 3-4

1B 獣の上 3

³ それから、御使いは私を御霊によって荒野へ連れて行った。私は、一人の女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神を冒瀆する名で満ちていて、七つの頭と十本の角を持っていた。

御使いによって、御霊に感じてヨハネが連れて行かれたのが、「荒野」です。ちょうど、これはイエス様ご自身が御霊に導かれて、ユダの荒野に導かれ、そこで四十日の断食後に悪魔から誘惑を受けられたことを思い出します。私たちも、同じような誘惑を受ける世にいます。そして「荒野」は、主の中にある憩いの水際とは、対照的です。主は、水を飲むことができるところに私たちを導きませんが、この女がいるところは荒野、すなわちどんなに求めても渇くしかない状態です。

そしてその女が、「緋色の獣」に乗っています。なぜ、「緋色」なのか？それは血を流す色であります。後で、聖徒たちの血を飲んでいる女の姿があり、それによって獣の背に血が滴り落ちている

のでしょうか、いずれにしても血を流している存在として現れています。または、豪華な姿を示しているのかもしれませんが。罪を犯しているエルサレムに対して、主がこう語られています。「エレ 4 章 4:30 踏みにじられた女よ、あなたはいったい何をしているのか。緋の衣をまとい、金の飾りで身を飾りたて、目を塗って大きく見せたりして。美しく見せても無駄だ。恋人たちはあなたを嫌い、あなたのいのちを取ろうとしている。」キリスト教が、コンスタンティノーブルでローマ帝国の国教となりましたが、東ローマ帝国の指導者たちは、このんで緋色の衣を着ました。豪華さを表すからです。

獣はもちろん、あの 13 章に出て来た反キリストの姿であります。「13:1 また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。」実は、ここ 17 章の姿は獣が、自分が神として宮に入って世界を支配する、患難時代の後半ではなく、前半の状態を示しているのでしょうか。この女は偶像礼拝、偽りの宗教の集合体と言ってもよいですが、獣を始めとする世界の国々がその宗教を支えている形になっています。どの宗教も、国の権力の上に居座ることが多かったです。日本では仏教が既得権力となっており、戦国時代、それを非常に嫌った織田信長が地蔵さえ破壊したという歴史を持っています。



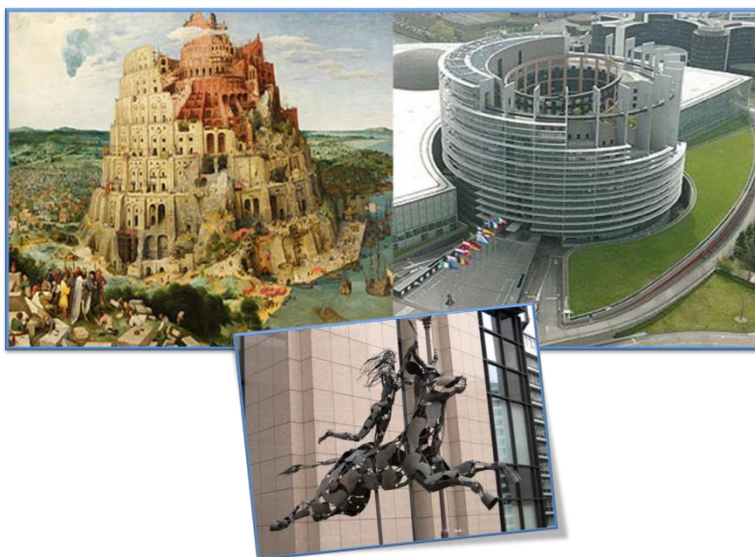
そしてキリスト教の中でまさに、このことが起こりました。国教化しました。先に話した、キリスト教の国教化によって、世の権力と教会が一つになりました。今、バチカンのところには世界の国々の指導者が謁見に行きます。そしてバチカンには莫大な富が集まります。バチカンの建造物や法王の銘がある硬貨などに、この女の姿を掘っているものがあります。

そして欧州連合(EU)の建物の前には、獣に乗った女の彫刻があります。議会の建物は、まさにバベルの塔を模したような形になっています。ユーロの硬貨にも、獣の上の女が刻まれています。

2B 豪華な身の飾り 4

4 その女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。

女は緋色だけでなく、紫色の衣を着ています。紫色は王権を示しますから、女王



気取りなのです。そして、「金と宝石と真珠」で身を飾っています。これに拠り頼んで淫行を行なっているということ、女の魅惑を出しています。

そして、「金の杯」を手に持っていますが、そこには、「忌まわしいものと、自らの淫行の汚れで満ちた」になっているとあります。これはエレミヤの預言の、バビロンについてのところから来ているものです。「エレミヤ 51:7-8 バビロンは【主】の手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲む。それゆえ、国々は正気を失う。8 バビロンは、たちまち倒れて碎かれる。バビロンのために泣き叫べ。その痛みのために乳香を取れ。もしかしたら、癒やされるかもしれない。」私たちが、世の流れ、流行、そういったものを、主との関係を犠牲にして追い求めれば、その杯はいずれ碎かれるのだということを知らないといけませんね。

3A 大バビロン 5-6

1B 秘められた名 5

⁵ その額には、意味の秘められた名、「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」という名が記されていた。

14 万 4 千人の神の僕が、額に神の印が与えられていましたが、女は秘められた名が額に記されています、それが、「大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」というものです。この「秘められた」というのは、奥義とも訳して良い言葉であり、「これまで隠されていたけれども、今、明らかにされる」という意味合いがあります。このバビロンは、歴史において、紀元前六世紀に世界を制覇して、エルサレムを破壊して、ユダヤ人を捕え移したその新バビロニア帝国だけを指しているわけではありません。その背後にある、秘められたもの、実に創世記から黙示録にまで流れている、秘められたものであります。あらゆる生きている人間の母がエバであったように、あらゆる憎むべきもの、霊的な姦淫を犯させているものの母なる存在を、指しています。

神は世界を造られ、人を造り、人と交わることをお考えになりました。けれども、人が罪を犯して、神から離れてしまいました。代わりに犠牲の血をキリストが流すことによって、人の罪を神がお赦しになります。そして、キリストによって神に近づく者を、神は受け入れてくださるというのが、神の備えられた良き知らせです。ところが、アダムとエバは、罪を犯した後に、裸をいちじくの木で覆おうとしましたね(創世 3:7)。自分の力で自分を贖おう、自分を救おうとする努力、これが宗教の始まりです。

ノアの時代の洪水の後、ニムロデという人が権力者となり、町々を征服していきました。「創世 10:8-10 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。9 彼は【主】の前に力ある狩人であった。それゆえ、「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。10 彼の王国の始まりは、バベル、ウルク、アッカド、カルネで、シンアルの地にあった。」ここ

の、「主の前に」というのは、「主に反抗して」とも訳すことのできるような言葉です。主に逆らう権力者で、その中にバベルがあり、人々は、神の命令に逆らって、自分たちで町を造り、自分たちで天に届こうとしました。「11:1-4 さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった。2 人々が東の方へ移動したとき、彼らはシナルの地に平地を見つけて、そこに住んだ。3 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作って、よく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを、漆喰の代わりに瀝青を用いた。4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」これが偶像礼拝の始まりです。新バビロニア帝国にも、バビロンの神マルドゥクを祭ったエ・テメン・アン・キがあります、「天と地の基礎となる建物」という意味で、まさに天に届こうとする塔です。

バビロンの宗教は、ニムロデから始まります。その神話は、その妻、セミラミスがいます。その間にタンムズが奇跡の中で生まれます、エゼキエル 8 章 14 節にタンムズの名が出て来ます。彼がいれば救い主であります。彼がよみがえったとする記念日があり、それで残念なことに、イースターという名前は、その妻であるイナンナ、バビロン名イシュタルから来ています。彼女は、エレミヤ書に出て来る「天の女王」と呼ばれています。これがその周辺のあらゆる宗教に通底しています。カナン人はアシュタロテです。エジプト人はイシスです。ギリシア人はアフロディテです。ローマは、ヴィーナス(ウェヌス)です。そして不思議なことに、国として拝む時にその存在が女性的な存在となってきました。日本では仏教がなぜか観音像にあるように女性的な存在となり、神道の神話には天照大神は女性であります。そしてカトリックにおいても、神の母といってマリアがあがめられるようになります。

このように偶像礼拝の発祥になったのがバビロンなのですが、そのユーフラテス河畔の地域に住んでいたアブラハムが、神によってそこを出て行くように命じられました。そして後に主が建てられた町が「エルサレム」である。ですから、エルサレムはバビロンに対抗して神が立てられた都であり、エルサレムがどのようになるかということによって、神の救いのご計画の進展を見ることが出来るのです。紀元前 586 年、エルサレムの町を破壊したのは、バビロン王国でした。バビロンはとてつもなく大きな都であり、世界の七不思議にも入っている「空中庭園」などがありました。都の中心にマルドゥクの神殿がありました。世界の王たちは、バビロンの富と淫行の罪を犯していました。そしてバビロンに頼っていた者たちは、ペルシア王キュロスが破壊した時に、大きな損害を被るのです。この偽宗教と偶像礼拝が、ヨハネの生きているローマ時代にも生き活きとしていました。皇帝礼拝やローマやギリシアの神話に基づく宗教があり、それによってキリスト者は、主の御名を保つために犠牲を払ったのです。そして、主が再び来られる直前まで世界の人々を支配し、終わりの日には如実に、そのことが現れます。

2B 聖徒たちの血 6

⁶ 私は、この女が聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見

て、非常に驚いた。

これまで、宗教は真実な信徒を迫害してきました。カインがアベルを殺したところから始まり、イスラエルの中で真実な預言者を迫害したのは祭司を始めとする、世に妥協した宗教者たちです。イエス様を殺したのも、墮落したユダヤ教の指導者たちでした。そしてローマ時代、先に話した国と宗教が絡み合って、真実な信仰を持っている者たちが迫害されました。ペルガモンの教会でも、サタンの王座がそこにあって、それでアンティパスが殉教したことが書かれていましたね。絶えず、教会史においてこの葛藤が続きます。戦時中は、キリスト教会は神道と国家が一体になった国家神道の中で、残念ながら妥協しました。ほとんどが神社参拝をしたのです。そして日本は敗戦しました。今、私たちに押し寄せているバビロンは、「一致」「平和」「人権」「愛」などのキャッチフレーズでやって来ています。世の強い流れの中で、しっかりと信仰を保つには圧迫を感じるでしょう。妥協して生きることが良いのだという強い圧迫を受け、事実そういった教えをする人たちが出てきています。これこそが、大バビロンです。

最後に、テモテ第二 3 章を読みます。「3:1-5 終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。2 そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。3 また、情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できず、粗野で、善を好まない者になり、4 人を裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快楽を愛する者になり、5 見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。」これらのことが世に見ます、困難な時代ですが、ところが実は教会の中に敬虔を装って、これらのものが入って来るということです。ゆえに困難と言ってよいでしょう。ヨハネが驚いたように、私たちも驚愕する、衝撃的なことが起こるかもしれません、けれども予め主が語られていたことなのです。